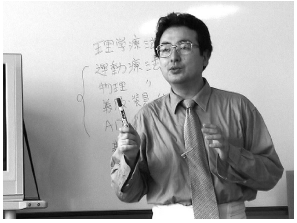
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	車椅子に乗ってみよう
Author(s)	玉地, 雅浩
Citation	臨床哲学のメチエ. 2003, 11, p. 18-18
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/10792
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka



五月十四日（火）
担当 たまち
テーマ
車いすに
乗ってみよう

車椅子に乗ってみよう
玉地雅浩

リハビリテ-ションの概念や理学療法士の仕事をまず説明した。次に、車椅子に関する基礎知識や取り扱い方、平地、坂道や段差での操作の仕方、障害はどのような場面で生まれるのか等を質問を交えながら説明した。その後、校外に出て実際に車椅子を自分でこいだり、人に押してもらうなかで具体的に困った事を挙げてもらい、車椅子で街中を移動する難しさを実感してもらうことにした。今回は車椅子での移動時の困難さに焦点をあてたが、少しでも身体に変化が生じた時には当たり前に過ごしている環境も、作った人はある基準を基にして作っているために、上手く適応できない人には大きな障害となる可能性がある事を想像してもらえる事を目標とした。

生徒さんの反応

授業では生徒さんのなかには、以前に学校が開いた車椅子の介助の仕方を希望者して習っていた人もいたため、車椅子に慣れている学生さんもいた。そして今回の授業では、学校の車椅子を使用した為にタイプも限られていた。そこで、もっと最新式の車椅子やテレビドラマで登場した物を借りるなどして新鮮味をもたせてもよかったと思う。それは今まで車椅子は移動手段としての目的だけが追求されてきたが、最近は座って仕事をしたり家事をするなど生活上で座るための機能がより追求されているからである。そのため快適性やデザインや椅子としての機能が求められている。車椅子に求められているものが変化しているということはそれを使う人の意識も変化している。それに我々は気付いているかをもっと強調できれば反応も違ったものになったかもしれない。

校外での体験は少し生徒さんが遊びたい気持ちを抑えがたい様に私には感じた。歩道の形や段差、溝やミラ-の高さ、坂道の角度など、作った時にはそれぞれ目的や基準があるが、全ての人に役立つ物にはなっていないし、時には障害となることを体験してほしかった。しかし、このような事は最近は見聞きする事も増え何となく知っていたり、想像できるため、体験しなくても考えたら分ることと学生さんは捉えていたのかもしれない。

反省

以上の事を踏まえて、反省としてはもっとダイレクトな障害体験をしてもらった方がよかったかもしれない。例えば、体をほう帯で固定したままで車椅子にすわって介助されるといかに介助する人もされる人も動きを制動できないか、或いは、脚が動かない状態で松葉づえをで歩いてみる。視覚が制限されると我々はどのような肢位をとったり歩き方になるかを皆で体験しても良かったと考える。具体的なイメ-ジを浮びやすくするために患者さんに了解をとってビデオで撮らせてもらおうかと迷った。患者さん達はおそらく主旨を説明すれば協力してくれるだろうが、今回は色々と考え見送った。　（たまちまさひろ）